

「偲ぶ會」

赤谷慶子

コロナ禍に人の集まる會合避けむがため、葬式は密葬および家族葬になりにけり。昔の勤務先の先達諸氏の葬儀のおほかたさもありなん。従ひて「偲ぶ會」の後日開催多し。文語の苑の發起人にもあり、朝日新聞の大先達昨年文月に逝去せり。葬儀は家族葬となり、三人集まり故人を見送りき。大記者なれば、新聞社の同僚及び後輩なほ「偲ぶ會」催すべしとの儀なれば、我は幹事の一人にて携はりき。先達の廣範にわたるその働き全て把握せられたるにはあらず。故人の定年退職後の働きを知る人ども皆無なれば、参列する者の中より十數名を選びて故人との交流の思ひ出を語らせたり。遺族は故人家の外の働きはなほ知らず、準備ゆゆしかりき。されど、参列する者の物語より察するに著しく幅の廣き活動せられたり。参列者より歸り際に故人の爲人ひととなりの懐の廣さや深さを垣間見るべかりきと、言の葉を残て散會となれば、幹事團としては、意義ある葬送なりきと安堵せり。

《令和六年一月二十七日受附》